

馬込から気持ちのよい風が吹いてくる

萬福寺だより

第37号

2020年冬号／no.37／令和2年12月1日発行

発行／曹洞宗 萬福寺護持会

HP <http://www.manpukuji.or.jp>

年末恒例「除夜の鐘つき」は中止いたします 年明け2日、3日の御祈祷諷經にお越しく下さい

萬福寺住職 安本 由道

今年春頃から続く新型コロナウイルスの感染拡大のため、日本だけでなく世界中の人々が不安を抱えながらの生活を余儀なくされています。

一方で、新型コロナウイルス感染者への差別、医療従事者や飲食店の方への心ない誹謗中傷等の事態も発生しており、行政への相談窓口が設けられるほど大きな問題となっています。宗門に身を置く人間としても、深く考えなければならぬと思っております。

コロナウイルスの終息が不透明であるため、大きな不安や恐れを抱く方は大勢いらっしゃるかと存じます。ですが、今最も必要なことは、正しい理解のもと、お互いを助け合い、支え合うことではないでしょうか。

不安・恐怖を抱くことは当然の感情です。しかし、その不安と恐怖も過剰になれば偏見を生み、結果的に多くの人々を苦しめる原因となります。

道元禪師は、生きとし生ける者がお互い慈悲の心を持つことを説かれていらっしゃいます。「慈悲」は、衆生の苦を除き、樂を与える意ですが、助け合う心、支え合う心、相手を思いやる心もまた慈悲の心でございます。

このような苦しい社会生活においても、道元禪師の仰る慈悲の心を持って、全ての人々に分け隔てなく、私たちがお互い尊重し合う社会を目指していければと切に願う次第です。

*

今年最後の報恩感謝の法要であります「歳末諷經」は例年12月31日午後11時より始め「大般若会御祈祷」後、除夜の鐘を撞きましたが、今年は、萬福寺の僧侶のみで午後4時頃の法要後、除夜の鐘（略式）を撞いて年内行事を終了することとしました。正月2日・3日午前11時より「大般若会御祈祷」を執行致しますので、墓参の際、ご参会お待ち申し上げます。



病氣平癒のご利益がある「不動明王」の
金屏風絵（佐藤朝山作・萬福寺所蔵）

行事予定

● 沐浴式・御開帳 12月14日（月）午前11時～（山内の僧侶のみのお勤め）

● 歳末諷經 12月31日（木）午後4時～（山内の僧侶のみのお勤め）

● 正月大般若会御祈祷諷經 1月2日（土）3日（日）両日午前11時～

御本尊が御開帳され、御札が配られます。初参りの際にお立ち寄りください

昨年の様子



伝承

えきびょう 疫病退治のために ちゅうぞう 铸造された ほんぞん 御本尊 江戸期の古文書が伝える じほう ゆらい 寺宝の由来

当山の御本尊の由来が「新編武蔵風土記稿」(文化・文政期=江戸時代〔1804年～1829年〕に編まれた地誌)に残されています。以下はその要旨です。

右写真:「三国伝来 阿弥陀如来略縁起」と題した古文書を収録した『萬福寺誌』平成17年発行

不空三蔵という僧が南インドを修行中、国中に悪病がはやり、大勢の死者が出て困り果てた帝から「どうしたら、この悪病から免れることができるか」と問いかねられます。三蔵は「お釈迦様のいらしたところ、お釈迦様のご神力で仏像を鑄造して祈念したところ、たちどころに悪病が平癒したと伝え聞きます。この故事にならってすぐに仏像を鑄造して信心すべし」と答えました。そこで帝はさっそく金銅を集め溶かしたところ、阿弥陀、観音、勢至のお姿が自然と現れ、これが三尊仏像になったそうです。三尊仏像の放つ光明は国中の病苦を払い、万民は安心を得られたといいます。

その後、不空三蔵は三尊仏像を中国に持ち帰り、多くの御利益を施し、何年もの歳月が経って天平勝宝三年(751年)に日本に伝来し、平家の祖・国香(常陸の国の長)の手に渡り、伝承した末裔の梶原平三景時がこれを御本尊として萬福寺を建立したとあります。

以来、毎年12月に御本尊を洗い清めるお身ぬぐいを行い、使った霊水や浄巾が病を防ぐものとして配られました。あるときお身ぬぐいの行事を怠ったところ、翌年疫病がはやり多くの村民が亡くなりました。これはお身ぬぐいの行事を怠ったためとして、住職・檀信徒がこぞってお身ぬぐいを行い、霊水・浄巾を与えたところ、たちまち治ったといえます。



御本尊「阿弥陀如来三尊仏」。中央が阿弥陀如来様、右が観世音菩薩様、左が勢至菩薩様

●御本尊は正月3が日に御開帳されます。

医学や科学が未発達の前は、檀信徒はじめ地域の皆様は、すぎる思いで悪病の一日も早い平癒を御本尊にお祈りしたことでしょう。医学が進歩した現在、ウイルスの感染拡大を極力抑えるため、私たちにできる予防を徹底し、檀信徒ともに助け合いながら、この困難を乗り越えていきましょう。

開催行事報告

新盆法要・孟蘭盆会法要

令和2年7月13日(月)

代々続く伝統行事

法要を通して結び合うことが大切です

午後1時から新盆法要が、続いて2時から孟蘭盆会法要が営まれました。今年は法要の時間も短縮し、恒例の法話も省略して執り行われました。多くの参加者がマスクを着用し、本堂入口の洗心閣・玄關で手指を消毒して法要に臨みました。

安本由道ご住職は「コロナ禍にもかかわらず皆様がご先祖様を偲び、ご供養に来てくださることは大変ありがたく、どうか無理なくお参りください」と話され、「変化の激しい時代ですが、代々続く伝統行事で日本独自の文化である法要は、ご先祖様あつてのものです。我々はご先祖様に生かされ、その恩恵を受けています。感謝してお墓参りをされ、奉仕や供養を通して家族・親族が結び合うことが大切です」と、今年初めて仏様になった故人を迎える新盆法要参加者に呼びかけました。



(上)ご住職のお話を聴く参加者、(中)椅子を離して配置、(下)法要後、卒塔婆を受け取る



大施餓鬼会法要

令和2年7月23日(木・祝)

コロナ禍の一日も早い終息を祈り すべての生命、ご先祖に感謝

8月1日が梅雨明けとなった今年、7月23日も雨模様となりましたが、本堂や境内のテントに参加者が詰めかけ見守るなか、大施餓鬼会法要が営まれました。例年では40人もの僧侶が読経しながら本堂を練り歩く荘厳な当山最大の行事ですが、今年は規模を縮小して行われました。

法要後には参加者全員で、コロナ禍の一日も早い終息を願い、すべての生命、ご先祖に感謝して施餓鬼棚(施餓鬼の時に設ける供養壇。三界万霊牌(※)を安置し、五色の供養幡を立て、供養のお膳を供える)に手を合わせて焼香しました。

※この世のありとあらゆる精霊を合祀した位牌。



(上、中)お焼香する参加者、(下)僧侶も参加者も密に注意して執り行う



萬福寺の公式ホームページをご覧ください。

馬込萬福寺

検索

<http://www.manpukuji.or.jp>

萬福寺の行事はどなたでも参加できます。

秋彼岸会法要

令和2年9月22日(火・祝)

お彼岸は自分の心を見つめ直す
いい機会です

密にならないよう本堂に設けられた70の席に加え、境内のテント席に檀信徒が参列するなか、午後1時から秋の彼岸会法要が営まれました。

導師を務められた安本由道ご住職は、「本日は短めの法要を心掛け、参会者の人数を絞って準備させていただきました。いま大切なことは、医療従事者、ご病気の方を偏見の目で見、差別の態度をとってはならないということです。お彼岸のこの日は、正しい気持ちをもって仏様に手を合わせ、正しい教えとはなにか見つめ直すいい機会です。人の悪口を言ったり、偏見の目で見たりしてはいけません」と諭されました。



本堂のほか境内にも席を設けて法要を営む

磨墨塚法要

令和2年10月11日(日)

「するすみ祭」は中止し磨墨塚で法要を営みました

10月11日(日)、南馬込三丁目の磨墨塚で安本由道ご住職を導師に法要が営まれました。萬福寺護持会役員、梶原殿運営スタッフ代表が参列・焼香して、地域の安全と繁栄が祈願されました。なお、毎年同時開催の「するすみ祭」(ふれあい動物園)は、密集を懸念して今年は中止といたしました。多くのお問い合わせをいただきましたが、来場者、とりわけ子供たちの安全を最優先して判断させていただきました。

INFORMATION

令和3年度 年回表

一周忌	令和2年
三回忌	平成31年、令和元年
七回忌	平成27年
十三回忌	平成21年
十七回忌	平成17年
二十三回忌	平成11年
二十七回忌	平成7年
三十三回忌	昭和64年、平成元年
五十回忌	昭和47年
百回忌	大正11年



やすらぎの写経会 2月11日(木・祝)のご案内

— 周囲の状況で開催を判断します —

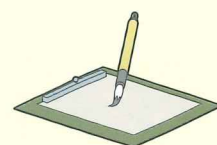
新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、今年度の写経会は6月、11月と中止させていただきました。残るは新春2月11日(木・建国記念の日)の写経会・納経諷経となりましたが、開催の決定は状況を見て判断させていただきます。近くなりましたら、寺務所までお問い合わせください。なお、これまで参加された皆様には、追ってご連絡いたします。

【開催の場合】

日時：令和3年2月11日(木・建国記念の日)
午後1時～2時30分

参加費：1,000円(用紙・筆は無料貸し出し)

※終了後、皆様がお書きになった写経を奉納する納経諷経を開催予定

御葬儀・法要の連絡は
萬福寺本堂総受付まで

法要は「追善法要」ともいい、故人が浄土で安楽であるようにと願いを込めて行うものです。年忌法要は葬儀とは違い予定が立てられます。できれば半年前、少なくとも3カ月前には準備を始めましょう。

御葬儀・法要・諸行事のお問い合わせ・お申し込み

萬福寺本堂総受付 ☎03-3771-2025

※梶原殿の会場使用につきましては、他社の葬儀社も利用できます。

編集後記

今年は新型コロナウイルスのせいで、大変な年となりました。家にこもりがちな日々が続く中、知人の訃報が伝わって来ました。残念なことに、コロナ感染を恐れて家族葬で済ませたとのこと。お別れする機会を失いました。

感染の広がりが心配される折、仕方がないことと思いつつも、がっかりした気分から抜けられません。弔問して焼香し、故人と共に過ごした時を懐かしみ、永遠の別れをかみしめるひとときに身を置いてはじめて、故人との別離を自らに納得することができるのではないか、ひとりの人が亡くなるということは重大なことであり、故人の世界は遺族の中だけに収まるものではないのでは、との感を勝手ながら強めた次第です。「故人を片付ける」ような葬儀もあると聞く頃、丁寧なお別れが出来るようになる日を、と望むばかりです。